

9	尾北	江南市立古知野北小学校	ニワ シュウ 氏名 丹羽 脩
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

研究題目

物語の構造を俯瞰的に捉える学習を通して、主題を自分の言葉で考え、表現する力の育成
ー小学校第5学年国語科「たずねびと」の実践を通してー

1 研究主題

本実践では、小学校第5学年国語科「たずねびと」を教材として、物語の構造を俯瞰的に捉え、主題を自分の言葉で考え、表現する力を育てることを研究主題とした。また、児童が場面ごとの出来事を追うだけでなく、設定・山場・終結のつながりや、登場人物の心情変化を関連付けて読むことを目標とした。

2 主題設定の理由

本学級の児童は物語文の学習において、あらすじを追うことはできても、作品全体の構造や主題にまで考えが及ばない児童が多い。特に、人物の変化や叙述の意味を結び付けて考えることに課題が見られた。平成29年告示小学校学習指導要領には、「人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること」が求められている。本教材「たずねびと」は、主人公が広島での出会いを通して、考えを深める物語であり、場面のつながりを意識しながら全体像を捉える学習に適している。また、戦争や原爆を直接知らない児童にとって、資料や映像を通して背景を補いながら読むことで、内容理解を深めやすい教材である。そこで、場面ごとの心情変化を整理しながら、物語全体を見渡す学習を行うことで、児童が主題を自分の言葉で考え、表現できるようにしたいと考えた。

3 研究の構想

(1) 目指す児童像

物語の全体像を捉え、場面ごとの心情変化や叙述を根拠にして、自分の考えをもち、友達との交流を通して読みを深めることができる児童。

(2) 仮説

仮説1

物語の構造を整理すれば、児童は場面のつながりを捉え、全体像を俯瞰して読むことができるだろう。

仮説2

意味調べ、写真や動画、現地資料などを通して、物語の背景理解を深めれば、児童は叙述を根拠に登場人物の心情や主題を考え、自分の言葉で表現できるだろう。

(3) 研究仮説における手だて

【仮説1における手だて】

① 物語文の全文の掲示

物語の本文全体を教室内に掲示し、児童が学習のどの場面においても、作品全体を見渡せるようにする。これにより、場面相互のつながりや物語全体の流れを意識しながら読むことができるようになる。

② 設定・山場・終結の色分け

物語の構成を視覚的に捉えられるように、設定を緑色、山場をオレンジ色、終結を青色で色分けする。場面のまとまりや構成の変化を一目で把握できるようにし、物語全体の構造を意識した読みにつなげる。

③ 場面ごとの主人公の心情を表にまとめる

叙述を根拠として、主人公の心情を読み取り、「いつ」「どこで」「誰が」「何をした」「どのように感じたか」という観点で表に整理する。出来事と心情の関係を可視化することで、心情の変化を読み取りやすくする。

④ 板書で叙述をつなぐ

重要な叙述や語句を線や矢印で結び、出来事や心情の関連を整理する。叙述同士のつながりを可視化することで、児童が根拠をもって考えを形成できるようにする。

【仮説2における手だて】

① 意味調べの実施

国語辞典を活用して語句の意味を調べる活動を位置づける。語句の意味だけでなく、用例にも着目させることで、本文中での使われ方を理解し、叙述をより正確に読み取れるようにする。

② 動画や写真を視聴する

広島や原爆に関する写真や映像資料を提示し、戦争や原爆について具体的に理解できるようにする。物語の舞台となる広島への理解を深めることで、作品の背景について、実感を伴って捉えられるようにする。

③ 関連サイトの二次元コードの掲示

児童が自分で調べたいときにすぐアクセスできるようにし、学びを広げられるようにする。

④ 戦争や原爆に関する図書コーナーの設置

教室内に戦争や原爆、平和に関する図書を集めたコーナーを設置する。授業で生じた疑問や関心に応じて児童が自由に本を手に取り、自主的に調べたり考えを深めたりできる環境を整える。多様な資料に触れることで、物語の背景理解を深めるとともに、自分なりの考えを形成できるようにする。

⑤ 原爆供養塔納骨名簿を掲示

作品に出てくる「原爆供養塔納骨名簿」を掲示することで、主人公の気持ちに近づけるようにする。また実物を見ることで、今もなお、身元の分からない人がたくさんいることを実感し、主人公の思いや作品世界への理解を深められるようにする。

⑥ 教員自身が現地に赴き、写真や資料を用意する

教員が広島を訪れて収集した写真や資料を教材として提示する。現地で得た情報や体験を共有することで、児童が物語の背景を具体的にイメージし、作品への興味・関心を高められるようにする。

⑦ ICT 機器による振り返りの実施

自分の考えを整理するとともに、友達の考えと比較することで、自らの読みを見直し、考えを深められるようにする。

(4) 単元構想

時間	本時の内容	手だて
1	・題名、イラスト、リード文から物語を想像する。 ・物語を全文読む。 ・初発の感想を書き、友達と交流する。 ・学習計画（単元の流れ）を掲示する。	・イメージマップを使用する。 ・全文の色分け掲示を用意する。 ・戦争や原爆について、考えの記述ができるように観点を示す。
2・3	・綾の心情の変化を場面ごとに整理する。	・場面ごとに表れたものや人物、叙述、心情を表にまとめ整理し、心情の変化を読み取りやすくする。
4	・出来事が綾の考えにどう変化を与えたのか考える。	・全文を見返し、重要な言葉や文にサイドラインを引いたり、矢印で結んだりする。 ・設定と終結での綾の考えの違いに着目させる。
5	・広島や原爆供養塔についての理解を深める。	・教員が実際に現地に行って集めた写真や資料を示す。 ・動画を視聴し、当時の様子を知る。
6	・綾はこの旅を通して、どのように考えが変化したのかを考え、まとめる。	・これまでの学習を振り返り、設定での綾の考えが、どんなものに出会ったり、体験したりして、終結での考えに変化していったのかを表や写真を用いながら考える。
7	・物語全体を通して感じたことや考えたことをまとめ、交流する。	・学習計画の再確認をする。 ・教室内の掲示物で学習の振り返りをする。

4 研究の実践と考察

(1) 仮説1における実践と考察

仮説1を検証するために、物語の構造を視覚的に捉えやすくする手だてを中心に授業を展開した。まず、物語を俯瞰的に捉えることができるように、初読のときに全文を掲示するとともに、設定・山場・終結と場面のまとまりごとに色分けを行った（資料1）。

また、各児童の教科書にも同様の色分けを行うことで、教室掲示と教科書を関連付けながら学習を進められるようにした。児童は、物語の全体を確かめながら、「どの場面で綾の気持ちが変わるのか」「どこが物語の山場なのか」を意識して学習に取り組む姿が見られた。



資料1 全文掲示・色分け

第2・3時では、各場面の出来事と綾の心情を表に整理した。綾が出会ったものや人物、そのときの心情を関連付けながらまとめる活動を位置付けた。児童は本文にサイドラインを引いたり、表に叙述を書き込んだりしながら、綾の心情変化を具体的に捉えていた（資料2）。

第4時では、場面相互のつながりに着目し、「どの出来事が綾の考えの変化につながったのか」を考える学習を行った。板書では、重要な叙述を線や矢印で結び、出来事や心情を可視化した。また、関連サイトの二次元コードを示し、必要な情報を自分で調べられるようにしたことも、児童の考えを支える手だてとなった。

第5時では、広島や原爆について理解を深める学習を位置付けた。教員が現地で収集した写真や資料、原爆供養塔納骨名簿を掲示した。また、原爆についての動画を視聴した。さらに、教室には戦争や原爆、平和に関する図書を集めた図書コーナーを設置し、児童が興味や関心に応じて、自由に本を取り、学びを深められる環境を整えた。児童は資料や図書を活用しながら、「綾が見た広島は、ただの観光地ではなく、戦争の記憶が残る場所である」と捉えることができた。こうした物語の背景を理解することは、物語の構造理解と結びつき、第6時の綾の考え方の変化を全体として、考えるための土台作りとなった（資料3）。

第6時では、「綾はこの旅を通して、どのように考えが変化したのか」を中心課題とし、これまで整理してきた全文の掲示や表、資料を使って、設定と終結における綾の考え方を比較し、物語全体を通した叙述の変容に基づいて考える姿が見られた。また、場面ごとに色ごとに分けたワークシートを活用することで、物語全体の構成を意識しながら、自分の読みを再構築することができた（資料4）。ICT機器による振り返りでは、「これからずっと戦争の恐ろしさを忘れず、もう二度とみんながこのような思いをしない世の中になってほしい」「原爆の恐ろしさを改めて知った」などといった考えが出てきた。

本実践を通して、全文掲示や色分け、表を用いたことは、児童が物語の構想を視覚的に捉えることで有効であった。特に全文が常に見えることで、児童は場面を切り離して読むのではなく、前後のつながりを意識しながら読むことができた。また、色分けによって、設定・山場・終結が明確になったことは、物語のどこで大きく流れが変化するかを考える手がかりとなった。児童の「どこが大事な場面なのか」という意識を高めたと考えられる。



資料3 現地訪問による資料



資料4 色で場面分けしたワークシート

(2) 仮説2における実践と考察

仮説2を検証するために、作品の背景となる広島や原爆について理解を深めることで、綾の心情や作品の主題をより深く読み取ることができると考え、背景理解を促す教材や学習環境を工夫した。第5時では、教員が現地に赴いて撮影した写真や収集した資料を提示し、児童が作品の舞台となる広島を思い描くことができるようにした。特に、原爆供養塔納骨名簿を掲示したことは、単なる地名や施設としてではなく、多くの人々の命や思いがそこにあることを実感させる手だてとなった(資料5)。

児童は写真や名簿を見ながら、「こんなにも家族がわからない人がいるんだ」「戦争は昔の出来事ではなく、今にもつながっているんだ」といった発言をしていた。

さらに教室には戦争や原爆、平和に関する図書コーナーを設置した。授業中だけでなく、朝読書の時間や休み時間にも図書を手に取る児童の姿が見られ、「もっと広島について知りたい」「原爆について調べてみたい」と主体的に学習を進める様子が見え始めた。授業で生まれた疑問を自ら解決しようとする姿が見られたことから、図書コーナーの設置は、児童の学習意欲を高める有効な手だてであったと考えられる。

また、関連サイトの二次元コードを掲示し、必要に応じて子ども自身が調べ学習に取り組むことができる環境を整えた。これにより授業中だけでなく、疑問を確かめたり、さらに知りたいことを深めたりすることができた。併せて意味調べでは、「言葉・意味・例文」を意識させ、本文中の語句を文脈で確かめながら読むようにした。戦争や原爆に関する動画も視聴し、視覚的・聴覚的に内容を捉えた。こうした背景理解を踏まえて物語を読み返したところ、児童は綾の心情を戦争の歴史や広島の現状と関連付けながら考えられるようになった。「綾は名簿を見たことでたくさんの命が失われたことを感じた」「広島は綾の思う想像以上に、戦争の爪跡を残していて、恐ろしくなった」などが発言として聞かれた。

現地資料や写真、名簿、動画などの背景理解の手だては、児童が物語を自分事として受け止める上で大きな効果があったと考えられる。特に、広島で撮影した写真や原爆供養塔納骨名簿は、児童に強い印象を与え、教科書の中の出来事を歴史の現実へと結び付ける役割を果たした。児童が「実際にあったことなんだ」と実感することは、綾の旅の意味や心情の変化を捉える際の土台となった。

ICT 機器による振り返りでは、「平和な毎日は当たり前でないことが分かった」「これからは戦争について学び続けたい」「自分たちも戦争があったことを忘れず、平和な世の中をつくっていきたい」などの記述が多く見られた。背景理解を深める教材や学習環境を整えたことで、児童は作品世界への理解を深めるだけでなく、物語の主題を自分自身の生き方と結び付けて考えることができた。



資料5 原爆供養塔納骨名簿

5 研究の成果・今後の課題

(1) 研究の成果

本研究では、「物語の構造を俯瞰して読む力を育成するための指導の工夫」を主題とし、物語の構造を視覚化する手だてと、作品の背景理解を深める手だてを取り入れて実践を行った。

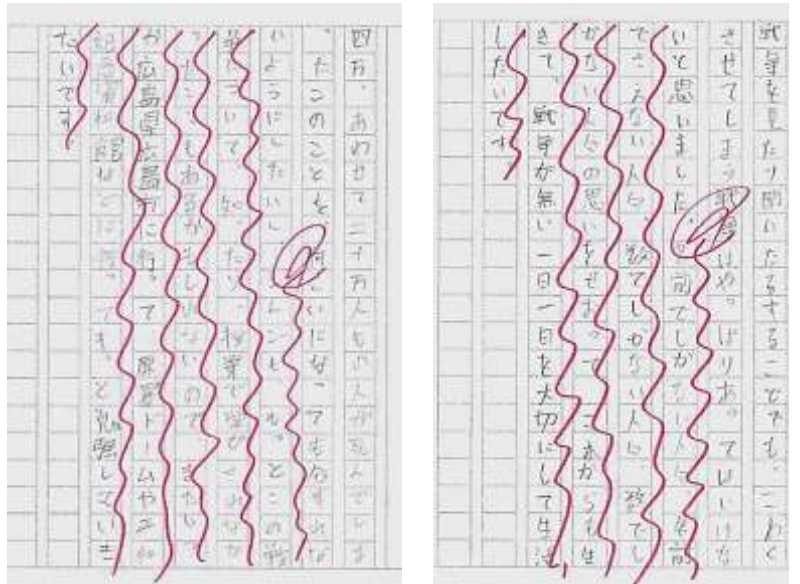
仮説1では、物語全文の掲示や場面構成の色分け、主人公の心情を整理する表、叙述同士を関連付ける板書などを取り入れた。これらの手だてにより、児童は物語を場面ごとに読むだけでなく、物語全体の流れを意識しながら読む姿が見られるようになった。また、設定と終結を比較しながら主人公・綾の心情の変化を捉え、叙述を根拠として、自分の考えを説明する姿も増えた。物語の構造を視覚的に整理したことで、場面相互のつながりを意識した読みが促され、俯瞰的に作品を捉える力の育成につながったと考えられる。

仮説 2 では、広島や原爆に関する写真や動画、教員が現地で収集した資料、原爆供養塔納骨名簿、戦争や原爆に関する図書コーナー、関連資料へアクセスできる二次元コードなど、多様な教材を活用した。児童は資料を通して広島の世界や戦争の実態を具体的に理解し、物語の背景を踏まえて、主人公の心情や行動を考える姿が見られた。特に、図書コーナーを活用して自ら資料を手に取り、休み時間にも調べ学習を進める児童が見られるなど、主体的に学びを深める様子もうかがえた。

また、振り返りでは、「綾の気持ちが最後に変った理由が分かった」「広島について知ったことで、綾の思いがよく理解

できた」「平和について自分も考え続けていきたい」といった記述が見られた。(資料 6)

これらのことから、背景理解を深める学習は、作品の理解を支えるだけでなく、主題について自分自身の考えを形成することにもつながったと考えられる。



資料 6 児童振り返り

(2) 今後の課題

本研究では、物語全文の揭示や場面構成の色分け、主人公の心情を整理する表、背景資料の活用などの手だてを取り入れることで、児童が物語全体を俯瞰しながら読み、主人公の心情の変化や作品の主題を捉える力を育成することを目指した。

実践を通して、物語の構造を視覚的に示したことで、児童は場面相互のつながりを意識しながら読み進める姿が見られた。また、広島や原爆に関する写真や動画、教員が現地で収集した資料、戦争や原爆に関する図書コーナーなどを活用したことで、作品の背景理解が深まり、主人公の心情や主題について、自分の考えをもって読む児童が増えた。

一方で、背景資料から得た情報を本文の叙述と十分に関連付けて考えることが難しい児童も見られた。また、自分の考えを交流する場面では、友達の考えを受け止めながら自分の読みを深めることに課題が見られた。今後は、資料と本文を結び付ける発問をさらに工夫するとともに、個人思考・ペア交流・全体交流を効果的に組み合わせ、多様な考えに触れながら学びを深められる授業づくりを目指していきたい。

さらに、本実践では『たずねびと』を教材として研究を進めたが、今後は他の物語教材においても同様の手だてを取り入れ、その有効性を検証していきたい。物語の構造を視覚化することや背景理解を支える教材を工夫することは、他の教材においても児童の読みを支える手だてになると考えられる。

今回の研究を通して、児童が物語を場面ごとではなく、作品全体の構造や背景と関連付けながら読むことの大切さを改めて実感した。今後も、児童一人一人が叙述を根拠に自分の考えを形成し、作品の主題について主体的に考え続けることができるよう、授業改善に努めていきたい。

6 引用・参考文献リスト

- ・文部科学省 (2018)「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 国語編」文部科学省
- ・文部科学省 (2018)「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編」文部科学省
- ・アーサー・ビナード (2012)「さがしています」童心社
- ・広島市公式ウェブサイト 広島市 取得元 : <https://www.city.hiroshima.lg.jp/>